

此電報には必ずや重大なる意味がなくてはならぬ。

偕て予は倫敦に歸着して、間諜撃退團の同志に會つて見ると、彼等は予に波曼の後を跟けて其の活動の目的を突き止めんことを要求した。

『それは譯のない事だ。が、彼奴は果して露西亞の何處を指して出掛けたのだらう。』

『先づ伯林へ歸つて、そこから或特別任務を帯びて、波蘭へ急行を命ぜられたらしいのだ。』

『ぢや、伯林で追ひ付かう。』

其夜は種々策戦計畫の爲めに更かし、翌朝かねて懇意なる露國大使から特別旅行券を得、直ちに海峽を渡つて獨逸の首都へと志した。時は恰も冬の最中なれば、旅行は寒くて不愉快であつた。兎角して伯林に到着し、探つて見れば残念！敵は早くも一日前に都を去つて、東波蘭の奥太露區なる町に出立した後であつた。予はさういふ淋しき田舎町の名を聞いた事もない。けれども一刻の猶豫もなく其町に向つて急行せねばならなかつた。

あゝ、おもへば不思議なる使命かな！傳奇と、絶えざる變化と感興とに満てる今回の使命よ——而も其中に一味危険の感じがない

でもない。

彼間諜は果して何の目的があつて、征路北に遙かなる露領へは旅立ちしぞ。大陸の端なき地上を追ふて予は果して彼を發見し得るだらうか。

汽車は獨逸國境を越えて波蘭へと衝き進んだ。とある一寒驛にて汽車を捨てれば、それよりは櫂、一月の事とて満目白皚々たる大雪原、驛馬の鈴の音いと佗しく、途中淋しき一村の宿屋の木製の寢床に冷かなる夢を結び、次第々々に異郷の奥に入る。丘の吹雪、谷間の厚氷、凜烈たる寒威は毛皮の外套でも防ぎされぬ。

宿場々々にて馬を換へて進む。予の目的が奥太露區であると知つた茶屋の主人等は、何れも心配さうに首を振り、さも意味ありげの眼付にて見送るのであつた。

自然に耳に入る道々の噂さ、それが度重なるにつれて、予の胸中に一個の觀念が形造られた。予の心臓は躍つて來た。由來露の壓迫の下に不平滿々たる波蘭、そこには今革命黨が暴び出したらしいのだ。

「はゝア、波曼の古狸がこつちへやつて來た目的が初めて解つたぞ——奴さん。此方の人民を煽動して一騒動持上げやうとするのだな

露國が亂れて居るのは獨逸にとつて利益だからな。さうだ獨逸の平常の遣り口から見ると、確かに然うに違ひないわえ。」

危惧と不安とに驅られた予の體を、心なき櫓は容赦もなく運んで行つた。そして二日目の午後、終に目指した埃太露區に着いたが、予は一軒の宿屋の前に櫓から降り立つと共に、眞先に其玄關前の白雪が斑々として鮮紅に彩られて居るのに眼をつけた。それは血潮の塊りであつた。あゝ此の血潮は自ら總てを語つて居る。

一筋の凍つた河、其對岸の白聖の市街から響き來る無數の銃音、次で一大爆音、予が櫓の三頭の馬は驚いて跳ね上つた。

偕て宿屋の廣間に歩み入れば、高き煉瓦の暖爐を圍んで、恐怖に撲たれた男女の農民七八名何をか相談最中である。予は亭主に宿泊の事を談判したる後、夫等農民の間に割込んで、早速訊き出した。

「一體何の騒動です。あの銃音や火炎はどうしたと言ふんですか。」

「へエ、胡薩克兵がやつて參りましたのでね、有名の暴武者倉地露夫が大將なんで、手當り次第に此方等を撃ちまくるんですが。それと申すが、彼の波曼様——獨逸の方ぢやアあるが、私等には神様の様に有難い御人で——あの方がいらつしつてから、自由の爲めに露國と戦へつちう譯で、こんな騒動がハツ始まつたんですが。雖然、

氣味が悪いッたら御座りましない。ツイ今しがたも此家の前で婆様が一人撃ち殺されましたね貴君………。」

疲勞れたりと雖も予は一分時の猶豫もならなかつた。短銃を調べると悉く装填してある。予は厚き外套を脱ぎ捨て、宿屋を飛出で、橋を渡つて對岸の態と狭苦しさ貧乏町に入つて見た。多くは木造の家屋である。脚部に負傷した一人の男が血の痕を引きつゝ予が前を驅けてゆく。一軒の扉口には汚い婆様が兩手に顔を埋めながら、「子息や、子息や！——死んだか！——死んだか！」と咽び泣いて居る。

處々の扉口に臨時の防塞が出来て居る。材料は材木、古道具、舗道の石、壊れた車、錆びた針金等である。防塞の上には牡鶏を描いた真紅の旗、即ち革命旗が晴明なる霜空に輪廓鮮やかに翺つて居る。銃剣に身を固めた人民等が血走る眼で狂奔し怒號する。

其間を分けて次第に巷より巷と深入りするうちに、予は突然一人の波蘭人に腕を握られて、防塞の中へ引摺り込まれた。各防塞には狭い出入口が一個づゝ附いて居るのである。

「貴君、危険です。早くお隠れなさい！」
と言ふ聲と共に予の體は自然に防塞中の籠城兵の一人とされて了つ

た。扉口が閉ぢる。

危険な筈だ。胡薩克兵がまたもや殺到して來たのだ。

何たる酸鼻の状ぞや！ 既に幾戦闘を経たる後と見え、防塞の内
部には壘々たる死傷者の山をなして居る。男子ばかりではない、妻
も撃たれ、子供も切られて、悲痛なる苦惱の叫び、鼻を衝く鮮血の
匂ひ！

巷に溢れる呐喊の聲と共に胡薩克兵はいよ／＼襲來して來た。彈
丸がバラ／＼と屋根や壁に當る。端から防塞を破壊せんとして雪崩
の如く押寄せる。裏通りの防塞も同様の始末だから、我々は腹背敵

を受けてゐるのだ。而も人民等は防塞の上に攀ぢ登り／＼彈丸を籠
めかへ／＼して應戰する。忽ち頭を撃たれてコロ／＼と落下する者
が頻に相次ぐ。

此中の首領と見えるのは一人の瘦せた色黒の青年であつた。何で
も莫斯科の大學生ださうだが、これが防塞上の砲火の間に凜然と突
立つて、紅旗を打振り／＼絶叫する。

「諸君、奮戦しろ！ 露帝を打敗れ！ 悪人共を殺して了へ！ 獨
逸帝國萬歳！ 自由萬歳！ 彼奴等は諸君の妻子眷族を殺戮したぞ
！ 諸君、此の怨恨を忘れるな！ 復讐しろ！ 奮闘しろ！ 命の

ある限り戦へ！ そしたら勝つ、勝つたら——』
 と言葉の終らぬ中に、彼の顔は颯と一面に血潮を浴びた。ウンと一
 聲墜落して打倒つた。

予は危険が甚だ切迫しつゝあるを感じた。各所の防塞は次第に陥
 落しつゝあるではないか。敵にして一旦此防塞内に亂入せんか、我
 等は塵殺の憂目を見る事必定である。予にはまだ大なる使命が残つ
 てある。予は此處で殺さるべく餘りに貴重な體である。

で、予は彈丸を精々と運ぶ婦人連の間を彼方此方に掻き分けつゝ
 安全の隠匿所や何處と搜し廻つた。時しもあれ、突如電光の如く予

の眼を射たものがある。

「ヤツ、波曼だ！」

裏口の防塞の隅あたり、硝煙濛々たる中にチラリと浮んで直ぐ消
 えた鷲鼻の間諜の赭顔、それを何うして見逃さんや。彼奴だ、彼奴
 がこんな暴動を煽て上げてゐるんだ。畜生、思ひ切つて撃つてやら
 うか……と、予は短銃握る手に力を籠めたが、いや／＼革命軍の崇
 拜する人物を其巢窟の中に撃取るのは自ら求めて死地に入る様なも
 のであると思ひ直した。實際また撃たうとした處で彼の姿は變幻出
 没、何時しか煙の奥に消えてゐる。

迷へる予の精神はまた新しき一刺激によつて覺醒された。見よ、甲斐々々しき婦人軍の一人は、今しも何處よりか金屬製の小圓筒を運んで來た。予は我知らず慄然とした。

小圓筒は屋内より巷に向つて投出された。同時に起る百雷の如き大爆音、爆發藥は美事に敵の頭上に落下して、胡薩克將卒の慘死體は見る／＼山を築く。

爆發藥、また爆發藥！

天地を撼る爆音、悲鳴叫喚！

官兵の憤怒は絶頂に達したらしい。彼等は此復讐手段として恐る

べき綿火藥を選んだ。あはれや、各所の防塞は隣から隣へと粉碎されて來る。やがて予が籠つた防塞の番となつた。予の心臓は張り裂くばかり波打つた瞬間、ドン！空氣の大震動は鐵板の如く予の體を撲つて踰跄となつた。ガラ／＼／＼……驚破や、防塞の一角は猛火と硝煙との中に崩れ出した。

予は最早夢中である。其崩された一角より丸くなつて躍り出た。そして逃げた、逃げた……。兵火の巷を縦横無盡、韋駄天の如く驅りゆく。驅りながらも予は、到る處の街路に無慘極る殺戮が行はれつゝあるのを見逃さなかつた。

不圖消魂しき女の叫聲が耳を劈いたので、思はず立佇まつて四邊を見廻した。此處は砲火の名残り傷ましき廣小路の、とある曲角である。して叫聲の主は何者ぞ？

一場の危急なる光景が我が眼に入つた。

一人の髪黒く、容貌麗しく、美服を纏へる若き少女が、猛獸の如き大男の胡薩克兵に掴まつて居るところであつた。

「助けて下さいまし、何處助けて下さいまし！ ね、ね、貴君……私に殺されて了ひます！……」

蒼白なる顔に血を漲らして、懸命に抵抗し悶きつゝ、彼女は通り

すがりの手を救ひの神と打ち縫つて、息も絶えぐに叫ぶのであつた。

無慈悲なる胡薩克兵は物ともせぬ。鬼の如き片腕にムンズと纖弱

き少女の細腰を抱き、暗き一軒の空屋の中へ引摺り込まうとする。

予はしはし躊躇した。

「助けて、助けて、貴方、助けて下さいまし！ 助けて下されば神

様は屹度貴君に御恵みを垂れまする！」

彼女の哀願の叫びは予の腸を裂かんとする。その黒い大きな眼は無限の恐怖と愁思を籠めて、予の脳を射貫かんとする。

嚇と怒つた兵士は忽ち鐵拳をふりあげて少女の口端を擲りつけた。朱唇嵐に傷んで血がタラ／＼と流れ出る。

「やかましい、静にしろ！」

霹靂の如きその一喝！

此時予は初めて口を開いた。露語にて、

「此婦人を放し給へ！」

と命令した。

露兵はジロリと兇惡の眼を予に注いで、

「貴様は何者だ？ 何で干渉する権利があるんだ？」

「何者でも宜しい。我輩は人道の上から干渉する権利を持つて居る此婦人を放せ！」

とツカ／＼と進み出でながら叱咤した。

「生意氣なツ！ 撃つぞ！」

敵の片腕は水平に舉げられた。その手に握つた短銃の丸き銃口は予の面を去る二尺の近くに輝いてゐる。

疾く遅し、予の右手の指も亦彈金にかかつた。

少女は露兵の腕に纖々と昏倒しかゝつてゐる。

不思議の運命は、これより予を不思議の舞臺の中に引摺り込んだ。

下

予が電光よりも疾く短銃を差付けたのを見ると、胡薩克兵の狂猛性は其絶頂に達した。

「己れ、邪魔者！」

と其手が弾金にかゝつた瞬間、予の銃口は轟然一發、火と煙と彈丸とを吐出した。

發失命中！雲突く如き大男は腦天を射貫かれた。後へ二三歩ヨロ／＼と踉蹌めいて、短銃をガチャリと鋪石の上に落とす。彼も續

いて其上に大木の伐られたやうにドタリと倒れてつんじつたまゝ絶命した。

猛獸の手を免れた少女は恐怖と喜悦とに夢見る顔色、衝と予の前に飛び進み、感謝の言葉も後や先、予の左手を唇に取りて熱さ／＼接吻を施すのであつた。

予は此時初めて、少女が普通ならぬ美人である事を認識した。芳紀十八を出でざる花盛り、細腰、麗姿、その舉止、その服裝、この奥太露區の他の女とは雲泥の相違である。豊かな黒髪は、今の露兵と争ひし爲めバラリと解けて浪の如く双肩に漂ひ、胸衣はほころび

て恥かしくも雪を欺く肉をあらはし、優しき胸はなほ途切れくしの感謝の言葉のたびに高く低く喘ぐ。

それは偕ておき、此處にても寸分の猶豫はならぬ、予の見る所を以てすれば彼女は猶太人である。併し暴將倉地露夫は猶太人とて見逃す筈はない。

附近の大通りよりは益々砲火の凄惨な音と、老幼子女の現世からなる修羅場の叫びとが聞えて来る。恐しき塵殺、戦くべき殺戮が續いてゐるのだ。

「私と御一所にいらつしやいませー こちらへいらつしやいませ、

安全な場所へ御案内致しますー」

と息も絶えぐに言ひながら彼女は予が腕を引張らんばかりにして駆け出した。予は考慮する暇もなく、物に索かるゝ如く其後に續いた。

約四五丁ばかり、落武者の如く物蔭に身を潜めつゝ巷を幾曲りかする。やがて狭く薄汚き裏小路の突當り、一軒の重たく、暗く、濕つぼき家の前に至ると、鍵にて其大扉を開きて予を引入れ、後を閉ぢた。家の中は墳墓の如く森沈として人氣もない。物音もない。斯うして一二室を通り抜けた。最後に彼女は兎ある黒壁に有りとも分

かず構へられた秘密の扉を開けた。中には直ぐ物古りた石の階段が深い穴藏の方へ低まつてゐる。

「これをお降りなさいませ！ さア御早く——私も参りますから。」と彼女は何處からか手燭を取出し、それに火を點しつゝ促した。

足許を用心しながら冷たき石段を踏んで、暗くじめくとした地下の穴に降りて行く。こはこれ巖石を刳り抜いたらしき一個の日の目を見ざる穴藏である。見廻せば卓子がある。椅子がある。ランブがある。其他必要な日常品が一通り備はつてある。何時にても隠れる時の準備がしてあるらしい。

「此處にさへいらつしやればもう御安心で御座いますよ。見付かる氣遣ひは御座いませぬわ。加須夫なども逃出す前はここに隠れてゐたので御座いますから。」
と美人は手燭を卓子の上におく。

「加須夫と仰有るのは？」

と直と其面を瞻れば、彼女は急に伏目をなして頬を赭めた。無言は彼女の意味を語る。此穴藏へ以前に隠れた者は即ち彼女の戀人であつたのだ。

彼女の名は瑠璃葉と言ふさうだ。——それ以上身上を語らぬ。強

いて問へば斯ういふ答へをする。

「獨逸人は私共の友人で御座います。一ヶ月程以前に伯林から二人の獨逸人が當地へ忍んで参りまして、色々密議を凝した結果革命を起すことをお勧め下さいました。」

「では彼曼といふ男を御存じか。」

「えい、存じて居りますとも、彼曼様程の愛國家は御座いませぬ。

あの方ツイ一日二日前に御着きになりました、いよく戦争の火蓋を切る事になつたので御座います。」

などと言ひながらランプを點す。其間に予は手燭にて一層暗き巖窟

の奥を何心なく照し見たが、不圖怪むべき物を發見した。一脚の机の上に折曲られた種々の金屬の片がある。大小數種の管がある。皮下注射器によく似た微少の硝子壺が澤山ある！……

予は其一個を取上げて眼近く差寄せた所、瑠璃葉は忽ち駆け寄つて来て、

「まア貴君！ 大變ですわ！ 下にお置き遊ばせよ。その物に何

一つ手を御觸りなさいますな。二人とも粉々になつて了ひますから

！ 御覽遊ばせ、此方の方にありますのは出來上つた爆裂彈で御座いますよ！ ……えい、加須夫が製りましたのですけれど、持つて

逃げる譯に参りませぬ故残して参りました。私もこんな物を身につけて居りまする……。」

と胸の懐中より取出したのは、長さ四寸ばかりの眞鍮製のキラ／＼したる小圓筒、曩に防塞内にて見掛けたあれと同一物である。瑠璃葉はそれを示しながら、萬一の時にはこれを胡薩克兵に喰はす事、無論我身も共に粉碎する事を覺悟の事など凜然として述ぶるのであつた。

「ところで其加須夫といふ方は……貴君の意中の人でせう？ 一體どういふ御身分の方であるか序でに承り度いものですね。安心し

てお話しなさい——私は貴女の味方ですぞ。何處までも御力になるつもりですぞ。」

と問はれて幾度びか躊躇の後、

「ハイ、加須夫は實は獨逸人で御座いますの——伯林から参りましたので、職業は化學の技師で、それに無政府黨員で御座いますから今度の革命にも加擔致しましたので御座います。今日防塞で使ひました爆裂彈は皆彼の製りましたものですが、政府の詮議が厳しくなりましてツイ昨日逃出したので御座います……いえ、行先は解りませぬ。もう敵に捕へられて殺されたかも知れませぬ……なに致せ、

昨夜夜更けて突然に私の所へ参りまして、また逢ふまでと別離の接吻を致す間も忙しく駆け出してしましたくらゐる。何でも南の方へ國境を越えて落延びるとか申した限りで御座いますの。』

愁はしげなる其言葉の裡に、落人に對する無限の愛情が籠もつて我が胸を打つ。

外にはまだ殺戮が続いてゐるに違ひない。が、地下なる巖窟には其恐しき叫びも聞えて來ぬ。

黄きランプの光りは朦朧として巖窟内を照してゐる。予は傷める心を以て瑠璃葉の美しくも惱ましき笑靨のある顔を見詰めてゐるが

ふと視線を合せたその大きな瞳には涙の露のキラ／＼と閃くのを見た。

父母の素性を訊ねたが答へぬ。たゞ言葉の端々に富家の令嬢である事が微見えた。佛蘭西語は頗る流暢に語る。で、我々は未熟な露西亞語を止して佛語を用ゐる事にした。

「私のやうな初めて御眼に掛つた者をなぜ其様に御氣にかけて下さいますか。」

と彼女は嘆息をする。

「弱者を扶けるのは人間の義務です。それに貴女といふ方は最初か

ら私の心を惹きました。さもなくて彼の時露兵を一發のもとに斃し
はしません。」

「あゝ、ほんとに私といふ女はなぜかう失禮の事を申上げるんで御
座いませう！ ほんとに貴君は命の親でございますわ！」
と又も予の手を取つて二度び三度び接吻する。

「叱、静かに！」

と予は愕然として彼女を押し止めた。頭上で足音を聞いたからだ。

確かに人間の足音、罵る聲さへもする。

瑠璃葉は颯と顔色を變へ、

「胡薩克兵よ貴君！ 見付けたんだわ——見付けたんだわ！」

と燈火フツと吹き消すと共に例の小圓筒を確乎と握る。予は其腰を
抱いて引戻した。萬事休するに非んば無謀の事はさせたくない。

思へば此家に逃込む時、慌て、大扉に錠をおろすのを忘れたのが
不覺であつた。後を嗅ぎつけた數多の露兵は、最早室々を手暴く搜
索して、終に穴藏を突き留めたらしい。

明くなると念じた壁の一重の秘密扉も、難なくギーと明けられた。
微白い光が頭上から夢のやうに射して来る。其光の中に魔界の鬼の
やうに、幾つもく折重なつて輪廓を浮かした露兵の猛惡な顔！

ドヤ／＼と彼等は雪崩の如く穴藏に落ちて來た。そして抵抗する瑠璃葉と辨明する予の言葉とに耳をも假さず、手取り足取り穴藏から運び出した。予等兩人は血腥さき拔身の劍に左右を圍まれながら囚人の如く官軍の本營へと護送せられた。

只見る司令部にあてた公使館の廣間の中央、卓を圍んだ幕僚の中に、一際目立つ獍猛面の一將軍、軍服凛々しく關羽式の長髯に覆はれた赭顔の眼光爛々たる男は、これを正しく虐殺の張本人倉地露夫である。

予は早くも度胸を据ゑた。で、少しも悪怖れずに先づ懷中より一

葉の厚紙を取出して、

「將軍閣下、願はくは此署名を御覽が願ひ度い。拙者は英國の臣民ですぞ。そして此通り貴國大使の署名したる旅行券を所持して居るものでありますぞ。偶々當地の革命亂に遭遇して——」

「猶太人の美人と穴藏に隠れてゐた所を捕へられたといふ譯であらう、ハ、ハ、ハ！」

と將軍は冷笑一番して、

「好し、それから?……」

「左様戰亂を避ける爲めに穴藏に隠れて居つたのは事實です。」

「其穴藏が爆裂彈の製造所であつたのも事實だらう。」

斯う言つたのは予等を逮捕に來た一人の兵士である。彼は具さに巖窟内の危険な状態を將軍に上申した。

「あゝ、彼の證據を握られたか！ と予は思はず嘆息して瑠璃葉と眼を見合せた。

將軍は彼女の顔を睨みつけて、

「コレ女、其方の名は何と申すか。」

「瑠璃葉と申します。」

と彼女も意外に落着いて返事をする。

「何處の者であるか。」

「ピーターズブルクの者で御座います。」

「當地にて何を致して居つたか。」

予は口を出した。

「瑠璃葉は拙者と同行の者です。拙者は彼女を保護してゐるのです。」

「否、お前に訊くのではない。黙つて居れ。」

「すると閣下は貴國皇帝陛下の御名代として倫敦に駐劄しつゝある貴國大使の命令を阻害なさる御つもりですか。宜しい！ 此上は閣

下の越權の處置を貴國の大臣に報告するばかりですから其御覺悟に願ひ度い。」

「コレ女、なぜ返答致さぬか！」

と將軍は虎の如く咆哮した。

「ピーターズブルクの者が何故あつて當地にうろついて居るか。お

前は定めし地上權を有さぬ浮浪の無政府黨員であらう。どうぢや。」

「いや、閣下、實は瑠璃葉は拙者の許嫁の妻であるのです。英國臣

民の妻たる瑠璃葉は閣下の訊問に答ふる義務は一切ありません。」

此時賤しき服裝の背の低き一漢が卓子の前に進み出た。

「將軍閣下に一寸申上げる事が御座います。これなる瑠璃葉は有名なる革命黨婦人で御座います。此英國の紳士と許嫁などとは眞紅な嘘、彼の獨逸人にて爆裂彈製造の技師加須夫こそ此女の情夫で御座います。加須夫はツイ昨日逃亡して了ひました。」

斯う申出た男こそは、後にて知つたが、矢張り彼曼の腹臣の一人であつた。

「ウム、その加須夫なる者は今何處に居るか。私は先日彼の逮捕を命じておいた筈ぢや。」

「ハイ、彼は今朝當地を南に距る三哩の山林中にて我軍の爲めに撃

ち殺されて了ひました。」

と一人の兵士が報告に及んだ。

「えッ、加須夫が撃ち……アノ、撃ち殺されましたか！ ほんとに

加須夫が……あゝ、加須夫、々々！」

と瑠璃葉は迸しる熱涙と共に斷腹の叫聲をあげて、暫時は絶え入るばかり泣き悲しんだが、やがて屹と擡げた其顔は眉逆立ち、眼血走り、凄婉の形相血を吐かんばかりにて、

「コラ、倉地露夫の悪黨、よくも〜我が戀人を殺したな！ さア復讐するゆるゑ覺悟をせよ！」

「黙れ！ 爆裂彈製造の共犯者として汝も即刻死刑に處する！」

「ヤ、瑠璃葉を死刑に……！」

予は驚いて極力彼女の爲めに抗辨した。が、虐殺將軍は露國の法律を實行するのだとばかりで斷々乎として予の言を斥けた。そして終には予に浪散を命じ、兵士をして腕力的に予を館外に拉し去らしめた。

愁然として巷を歩む事約二丁、突然後へに百雷の如き爆音を聞いて跳ね返つた。

見よ、〜！ 露軍司令部の建物は異臭の硝煙と赤黒き火焰とに

包つまれて、瞬しゅん間かんにして微塵みじんに紛碎ふんさいされて了しまつたではないか！
 虐殺ぎやくさつ將軍しやうぐんと、幕僚はくれうと、間諜かんてふと、而しかして美うつくしき瑠璃葉るりはと共に亡なし矣し！

附錄 外交探偵の自白譚 終

大正四年六月五日印刷
 大正四年六月十日發行

不 思 議 の 鈴

不 許 複 製

著 者
 發 行 者
 印 刷 者

三 津 木 春 影
東京市日本橋區砲町六番地
 磯 部 辰 次 郎
東京市神田區松住町五番地
 菅 井 十 一 郎

(刷印舎文碓)

正 價 金 拾 五 錢

發 行 所

東京市日本橋區鐵砲町六番地

磯 部 甲 陽 堂

振替東京一五〇五六番

少年軍事探偵

三津木春影著

四六判二四一頁
特價金三十錢
郵税金六錢

■あゝ、一臂深く虎穴を探る青年少女の間諜撃退團！
彼等は軍隊や警察の掩護なしに、どんなに危険な働きをなしたらう！

三津木春影著

怪奇小説 密封の鐵函

四六判二六八頁
特價金三十錢
郵税金六錢

■密封の鐵函中の一萬圓を、如何なる巧妙手段で獲得せしか、正に此れ機智明察膽力の試金石。

田口櫻村著

黒手殺人團

四六判三二〇頁
特價金三十五錢
郵税金六錢

■全世界の注目を呼べる稀世の大殺人團を描きし壯快なる米國探偵奇譚にして一讀鬼氣肌を襲ふ。

278
284

終

